

○センニンソウの学名 (原 寛) Hiroshi HARA: The identity of *Clematis terniflora* DC.

センニンソウの学名については、長い間使われてきた *Clematis paniculata* Thunb. が先行名があって使用できないことが明らかになって以来、いくつかの異なった見解が出されてきた。その中日本での主なものに二つあり、一はセンニンソウを狭義に見て、細長い小葉をつけた日本産のセンニンソウの若い形につけられた *Clematis Maximowicziana* Fr. et Sav. (1878) を採用する意見である。他は大陸産のタチセンニンソウを同種とみなし *Clematis terniflora* DC. (1817) 又はその変種として扱う考えである。前説は中井先生 (1952 & 53) が提唱され、後説は大井博士 (1938) が採用されたが一時 *C. terniflora* に疑問があるとして前説の学名を用いられ、また田村博士 (1953) に支持されている。別に北村博士はセンニンソウはヨーロッパ、シベリアの *Clematis recta* L. の一亜種と考えるとの見解をのべておられる。

センニンソウは日本、朝鮮、中国などに普通な植物であり、また蔓性の観賞用植物として時に欧米やネパールなどでも栽植されているので、その学名をきめておく必要を感じ、大英博物館で問題の *Clematis terniflora* DC. の基準標本を再検した。その結果、結論から先にいえば *C. terniflora* は久内先生 (1933) が小泉先生の意見を紹介され、大井博士が詳しく説明された通り、センニンソウそのものである。

Clematis terniflora DC. の基準標本 (Fig. 1) は中国浙江省で George Staunton によって採集された果期のものである。写真からもある程度分るように、茎の様子、小葉の形、果序や果実の形などよくセンニンソウと一致し区別できない。果体は長さ 6-7 mm 幅 4.5-5 mm あり長い伏毛がかなり残っている。タチセンニンソウは茎が蔓性にならないほか、小葉はとがることが多く花梗はやや立って花序がホウキ状になる傾向があり、果体は少し小さく、毛は少なく短かく、熟した時にはほとんど無毛になる。この標本についてはすでに Forbes (1884) が当時の見解を詳しく紹介している。彼はこの標本の実大の精密な写生図を作ってこれを Maximowicz に送り、Maxim. は 1883 年 8 月 6 日付の Forbes 宛の返信で彼の意見をのべている。その中で Maxim. は写生図を見てそれがセンニンソウと同種であるとの見解をのべているのは流石で誠に興味深い。しかし Forbes は *C. terniflora* では小葉の脈が上面で凹んでいるがセンニンソウでは凹まないことを強調して、Maxim. の意見に従わず、*C. terniflora* はタチセンニンソウであると結論した。そのため Rehder, Hand.-Mazz. 等はこの説に従っている。しかしこの脈の性質は大井博士も書かれているようにはっきりしたものではなく、私も *C. terniflora* の基準標本を日本産のセンニンソウと比べて見たがはっきりした差異は見出せなかった。

更に分布の上から見ても中国中部はセンニンソウの多い地域であり、最近の中国高等植物図鑑 1 (1972) にもセンニンソウだけしか載っていない。浙江省にタチセンニン

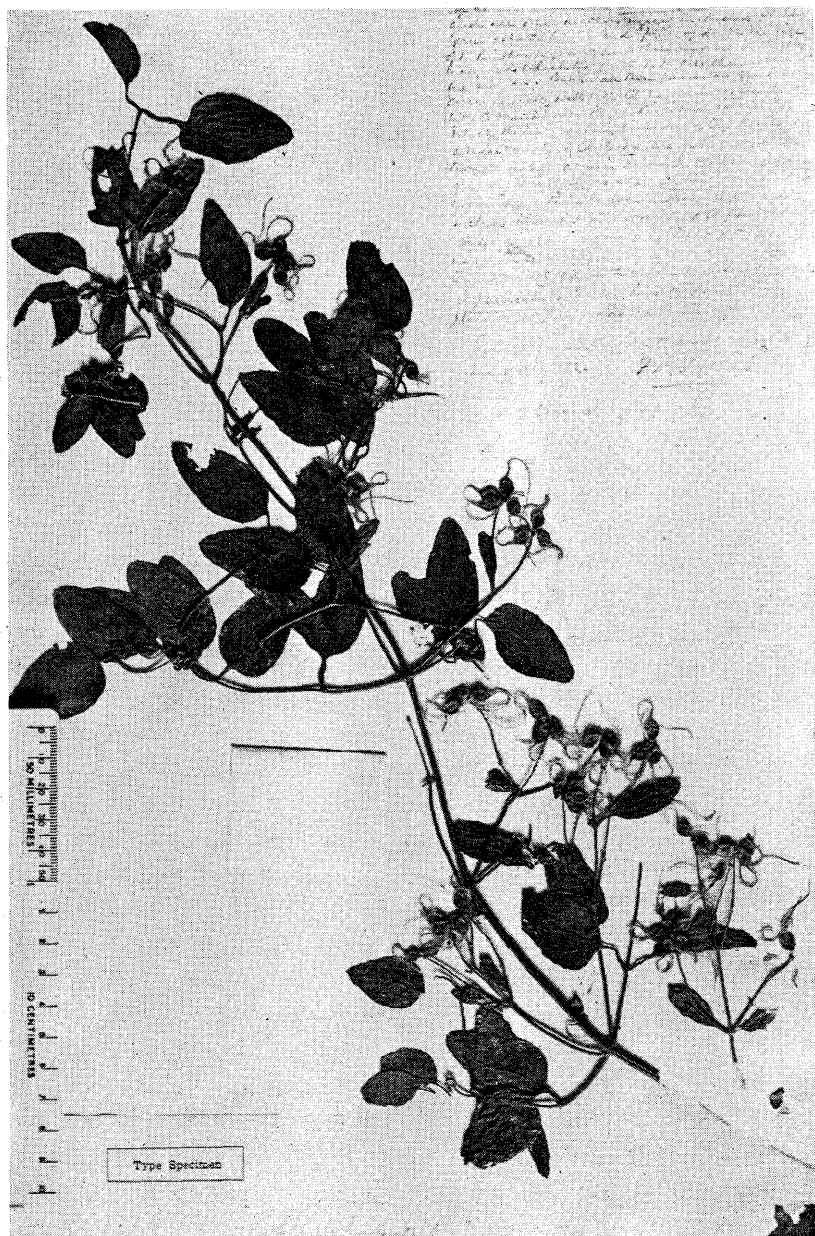


Fig. 1. *Clematis terniflora* DC. Type in BM.

ソウが産するかどうかは明らかでなく, Forbes がタチセンニンソウと同定した江蘇省産の標本もセンニンソウであった。以上のように色々な経緯はあるが, *Clematis terniflora* DC. は, Maxim. の見解通りセンニンソウであると判定される。

一方タチセンニンソウは, 独立種という見解の場合は *Clematis mandshurica* Rupr. (1857) の学名でよく, センニンソウの変種とみれば *C. terniflora* var. *mandshurica* (Rupr.) Ohwi (1938) が正名となる。

終にセンニンソウの学名を整理すると次のようになる。

Clematis terniflora DC., Syst. 1: 137 (1817); Prodr. 1: 3 (1824), excl. syn., sphalmate ut *C. tenuiflora*—Forbes in Journ. Bot. 22: 261 (1884)—Hisauichi in Journ. Jap. Bot. 9: 169 (1933)—Ohwi in Acta Phyt. Geobot. 7: 43 (1938); Fl. Jap. ed. rev. 600 (1965).

Clematis paniculata [non Gmelin 1791] Thunb. in Trans. Linn. Soc. 2: 337 (1794)—Rehder et Wilson in Pl. Wilson. 1: 330 (1913)—Icon. Cormophyt. Sin. 1: 745, f. 1490 (1972).

C. flammula robusta Carrière in Rev. Hort. 46: 465, f. 59 (1874).

C. Maximowicziana Franch. et Sav., Enum. Pl. Jap. 2: 261 (1878)—Ohwi, Fl. Jap. 516 (1953); ed. eng. 443 (1965).

C. recta L. subsp. *paniculata* (Thunb.) O. Kuntze in Verh. Bot. Ver. Brandenb. 26: 115 (1885).

C. recta subsp. *terniflora* (DC.) O. Kuntze, l. c. 114 (1885).

C. parviloba Gord. et Champ. var. *Maximowicziana* (Fr. et Sav.) O. Kuntze, l. c. 148 (1885).

C. dioscoreifolia Lév. et Van. in Fedde, Repert. 7: 339 (1909).

C. paniculata var. *dioscoreifolia* (Lév. et Van.) Rehder in Journ. Arn. Arb. 1: 195 (1920).

C. paniculata f. *Maximowicziana* (Fr. et Sav.) Honda in Bot. Mag. Tokyo 51: 644 (1937).

C. terniflora f. *Maximowicziana* (Fr. et Sav.) Honda, Nom. Pl. Jap. 505 (1939).

C. dioscoreifolia var. *robusta* (Carr.) Rehder in Journ. Arn. Arb. 26: 70 (1945); Bibl. 162 (1949)—Lawrence in Gent. Herb. 8: 32 (1949).

C. Maximowicziana var. *paniculata* (Thunb.) Nakai in Bull. Sci. Mus. Tokyo 31: 27 (1952), comb. non rite public.

C. Maximowicziana var. *robusta* (Carr.) Nakai in Bull. Sci. Mus. Tokyo 33: 7 (1953)—Lauener et Green in Not. Bot. Gard. Edinb. 23: 582 (1961).

C. terniflora var. *robusta* (Carr.) Tamura in Acta Phyt. Geobot. 15: 18 (1953).

Type: China Prov. Chekiang (G. Staunton, fr. in BM).

Distr. C. China, Formosa, Korea, and Japan.

Regarding the identity of *Clematis terniflora* DC., different opinions have been expressed by several botanists since 1884. Having examined its holotype (Fig. 1) in the British Museum (Natural History), I came to the conclusion that it is identical with *C. paniculata* Thunb., as first suggested by Maximowicz. The achenes are 6-7 mm long and 4.5-5 mm wide, sparsely covered with long appressed hairs. While *C. mandshurica* Rupr. (or *C. terniflora* var. *mandshurica* (Rupr.) Ohwi), with which *C. terniflora* was identified by Forbes, Hand.-Mazz. and others, tends to have acutish leaflets, more ascending pedicels, and smaller achenes covered with fewer shorter hairs. Moreover it is doubtful if typical *C. mandshurica* occurs in Chekiang. The specimen from Kiangsu (BM) identified by Forbes as var. *mandshurica* also is the same as *C. paniculata*. Thus *Clematis terniflora* DC. is the correct name for *C. paniculata* Thunb. (not Gmelin), as summarized above.

○花彙の著者名について (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: On the author name for Kwa-wi

島田充房の著である花彙 (明和 2 年, 1765) は当時相当に有名であったものらしいことは云うまでもない。この本の本文を Lud. Savatier が仏文に訳して Livres Kwa-wi の書名で 1873 年に巴里で刊行したことも周知の通りである。いままであまり眼を通さなかったので、最近一応目を通して見たところ、S 氏は当時の日本の文化の程度の一端を注意に価するものと考え仏文に訳されたことがわかった。それはとにかく、S 氏の訳文を順次見ていったら、巻頭の序文がそのまま訳され、その末尾に著者の名がフランス流ローマ字で Yonan Den Téroufsa となっているのに気がついた。我々は著者名を字音よみにしているのに、S 氏は Téroufsa としている。これを原本と照合して見たら、原本には雍南 田 充房とある。当時は中国風が流行していた頃であるから、風光明媚な京都を雍州に擬していたので、雍南は京の南のことであったことは、京都案内書に黒川道祐の雍州府志なるものがあることでわかる。また田は島田の島を略して中国風にしたものである。これもわかるけれども、充房をテルフサとされては字音よみのくせのある我々にはちょつと困らされざるを得ない。そのためか、松村任三先生の 1895 年版の植物名彙の邦文本草書類目録の 9 頁には、著者の姓だけとって Shimada としただけで名は略してある。多分読方に疑いがあったためかと思われる。ところで S